「Aさん、今日も遅刻です。」

飯豊町立飯豊中学校　二年　須貝　緑

僕の友達のAさんはいつも笑顔です。そんなAさんは、起立性調節障害という障害と戦っています。この障害は、自律神経の働きが悪くなり、起立時に身体や脳への血流が低下する障害で、朝起きられない、頭痛、全身倦怠感などが主な症状です。Aさんは、朝、目が覚めているのに、起き上がることができない、動けないといった症状が出るそうです。そのため、Aさんはみんなと同じ時間に起きることができず、五、六時間目ぐらいに登校してきます。登校できない日もあります。そんなAさんに対して、クラスのみんなは、ほかの友達と同じような接し方をしています。Aさんが遅く来ることを悪く言ったりする人は居らず、むしろ、来てくれて嬉しいと言っています。このようなクラスになれたのには、理由があります。

Aさんに起立性調節障害の症状が出始めたのは、小学五年生のときからでした。学校に遅刻するようになり、初めて起立性調節障害だと聞かされたとき、障害をよく知らない僕達には、理解できませんでした。障害で体が動かないはずなのに、学校で元気にしているAさんの姿を見て、「ただのズル休みだ。」とか「学校がめんどくさいだけでしょ。」といった、Aさんに対する陰口がたくさんありました。これが起立性調節障害の恐ろしいところです。起きられる時間になったとき、体が動く時間になったときには、障害を患う前のように、運動したり活発に動くことができるので、周りの理解を得にくいのです。障害を患う前のように動くことができるのは、とてもいいことなのですが、何も知らない僕達からしてみれば、どうしても「本当は障害じゃないんじゃないの？」「なんでそんなに元気なの？」という考えになってしまうのです。陰口を聞いたAさんは、ますます学校に来ることを嫌がりました。

その頃の担任の先生は、イジメや陰口を嫌う、とてもいい先生でした。「陰口をしている人

がいる。」とAさんの親から聞くと、先生は授業の時間を使って、泣きながら僕達に話して下さいました。Aさんは起きようと思っても起きられないのでとても悔しい思いをしていると いうこと、陰口を聞いてAさんはどう思ったのか、僕達が本当にしなくてはならないことは何なのか・・・・・。その話を聞いて、僕達は、Aさんがずっと一人で苦しんでいるということや僕達がAさんを深く傷つけてしまったことを初めて知りました。それ以降、僕達のクラスには陰口を言う人はいなくなりました。そしてAさんに謝ったり、学校に来れるように連絡する人が増え、Aさんの障害を受け入れることができました。

そして中学校。入学して早々に先生が、Aさんは今、起立性調節障害と戦っていて、頑張って学校に来ていると話して下さいました。そして、小学校からのAさんの友達が、みんなに起立性調節障害について説明しました。ですから、他の小学校から来た人達も含め、Aさんのことを悪く言う人や、Aさんが遅れて学校に登校してくることを、疑問に思ったり、羨ましがったりする人はいません。このおかげで、冒頭でも言った通り、Aさんは学校で笑って過ごせています。五、六時間目になっても登校してくることがその証拠です。

僕達のクラスがAさんの障害を受け入れることができたのは、障害についてちゃんと理解できたこと、Aさんの気持ちをしっかりと考えることができたこと、この二つが大きな理由だと思います。これからの未来、僕達が、いや、社会全体が障害を受け入れるために大切なことは、「障害について理解する」「障害と戦っている人の気持ちをよく考える」この二つを心がけていくことだと思います。誰もが障害を受け入れることができる社会を作るのは、僕達です。